

# 南方（フィリピン）

## 旭兵団満州国境より

### ルソン島での死闘

秋田県 辻原 猪一郎

大正十二年七月八日、代々呉服太物染物業をしている父謙藏、母宮子の長男（男三人、女一人）として生まれました。住居は大曲町の中心を流れる丸子河畔でした。父は家業のかたわら町議、調停委員、商工会長などをし、弟がジフテリアを肺炎と誤診され死亡したため病院を造るなど多忙な日々を送っておりました。

当時、東北地方は冷害・不作などで農家は苦況にあり、娘を都会に売りに出したような、暗い悲惨な時代

でした。そのような事情からか食料増産、農業地の秋田県であるからと、父は私を県立大曲農業学校へ入学させてくれました。昭和十六年三月、同校卒業と同時に家業の染色業に従事したのです。学校では農業実習や軍事教練が多くなっていました。進学を希望しましたが当時の時局はそれを許しません。

昭和十八年徴集兵としては一番最後の三月二十日、現役兵とし東満州の東安省半載河、第三国境守備隊第五十部隊入営のため連隊区司令部の指示で集合、入隊手続をし、広島駅より軍用列車の鑑戸を下ろしたまま博多に向かいました。釜山、元山、牡丹江を経て永安駅下車は三月二十四日夜半と記憶しますが、秋田地方と違い雪は少ないが、凍てついた寒い道をもせず、数百人が隊列を組んで十キロの道を行進し、第五十部

隊に着いて入営したのは二十五日朝でありました。

入隊して一週間はアツという間に過ぎ、その間はお客様待遇だったのですが、そろそろ厳しい教育が始まり、臆気ながら部隊の状況が分かってきました。部隊駐地から東方約三キロの所から標高二百メートルぐらいの岩山があり部隊の監視哨がありました。地下洞が掘られ、要所にはトーチカがある。銃眼からソ連領に砲口が向けてありました。ソ連軍は五十連隊が国境警備をしているとのこと。独ソ戦のため女性兵士が多いとの情報でした。

我々の入営前、白系露人の将校が逃亡し我が隊に亡命を求めてきて、その情報では「ソ連軍は我が軍の隙を見て侵攻して来るのは必至、今こそ逆に日本軍は攻撃する好機だ」と主張した幹部将校がいたとも聞きました。

初年兵教育ではソ連軍攻勢近しの雰囲気で行われ、実戦的射撃、突撃、対戦車戦想定速射砲、円盤地雷投擲等が多くありました。内務班での教育も精神教育を通り越した初年兵泣かせの所でもありました。古年

兵の洗濯や食事の世話なども義務付けられていました。私的制裁の禁止は強く指導されておったのですが、実際には、戦友同志の対抗ビンタ、帯革、上靴（革スリッパ）などで殴られることは始終ありました。

給与休養、極寒の冬季間が長い地区のため、生野菜の自給自足はできず不足し、乾燥野菜が多く、ビタミン欠乏予防のため肝油その他の支給もありました。主食は白米飯食は一切無く、高粱・大豆その他の混食米飯が三食続きました。聞くところによると白米は戦闘用に備蓄保管しておること。酒保の物品は極度に不足し、自由には買えるのは日用品のみ。下給品も初年兵に対しては甘味品、煙草、日用品などが、半月に一回キヤラメル一箱、煙草二・三箱で、酒の支給はほとんどなしです。初年兵の外出は一切許されず、営外に出たのは演習の名目で永安街の中間地区で演習教練、その帰途、川で鯉や鮒を手掴みで取った記憶も思い出の一つでした。

四月二十日、上等兵の階級を与えられ、幹部候補生教育隊（満州の東満部隊の集合で）に入隊しました。

動員令が発令というので部隊本部に呼ばれ「国家多難な時でもあり、動員令の趣旨は精兵の抽出、選抜だから御国のために頑張つて欲しい」と訓示をされ、また「幹部候補生教育中だが諦めて欲しい」とのことでした。

その後、下士官、兵を含む十四名を引率してハイラルに向かいました。「幹部候補生教育と同じくらいの機関で、進級はできるので心配しないで欲しい、ただただ動員の趣旨を得心し、祖国のため頑張つてくれ」とのことです。ハイラルへ到着したのは十月五日でした。

部隊は、当時北滿大興安嶺の大平原の守りに任じていた第二十三師団旭兵团でした。当師団はノモンハン事件で敢闘した小松原兵团で、南九州出身者の将兵約三万からなる精鋭部隊でした。私は速射砲隊へ入隊ということでしたが、旭一一八八部隊、第二十三師団衛生隊の中隊指揮班に編入になりました。

師団は本土決戦の捷号作戦により再度編成され、各部隊から転入された者が集合、一番健康な若い者と健

康に前歴のある者、召集・妻帯者と三分割され、前歴ある者は国境の満州里部隊、召集・妻帯者は当地ハイラルへ、そして若い体力がある者は南方要員と決まったとのことでした。

とも角も、毎日続々と入隊して来るので、整然とした抽出などではなく、ただただ目まぐるしいばかり複雑な業務で右往左往せざるを得なかったのが当時の状況でした。部隊編成業務は大変な任務で、先着の先任将校、上官諸氏の指示に従い相協力し業務に務め、各人の性格、経歴等を勘案しながら、ようやく間に合わせるという有様で、十月軍曹の階級を与えられました。十月二十三日、師団は台湾防衛部隊として発令されましたが後に比島派遣に変更されたといいますが、当時我々がそのようなことを知るはずありませんでした。

十一月三十日、ハイラル出発、各隊を乗せた軍用有蓋列車は防諜上窓はできるだけ閉めること。車内には菓が敷かれています、二、三〇人くらい詰め込まれ窮屈で暑苦しさもあり、臨時停車駅では全員ホームで

体操したり息抜きをしたが、衣服の縫目にはシラミが付いて悩まされました。

十二月四日、釜山駅に着き、急造の乗船待機宿舎に入り、早速、身体検査、マラリアその他の予防接種を受けました。私は肋膜炎の疑いを受け、背骨の空間に注射針を刺され抽出した液で検査を受けましたが、異状なしとし検査は通過しました。七日、船舶輸送司令部に出頭、部隊長命により乗船者名簿その他書式一切を届け、乗船名の指示を受け、部隊長に報告し、諸書類を提出しました。しかし、待機中、釜山港出港の日時等一切知らされておりません。

十二月八日、ブラジル丸に乗船、港内を見渡すと輸送船五、六隻、護衛船らしき船が四、五隻いるのを見ました。十日門司港入港、十一日、下関出港（戦時輸送船団史によると船団番号は#五三九号）。第三梯団は搜索第二三連隊を基幹とし、工兵一中隊及師団後方勤務部隊を乗せた船でした。船団は「ハワイ丸」「江浦丸」「安芸芸川丸」「ブラジル丸」その他併せて九隻の輸送船と護衛艦艇でした。

十三日、五島列島で敵潜水水艦の魚雷攻撃を受けました。「ハワイ丸」(梯団本部、九、四六七トン)には一、八四三人が乗船中であつたが、当夜は暴風雨で、真夜中、三列蛇行中の真ん中に位置していました。同船はもちろん、他の船も兵員その他を満載しているので吃水線も浅く、特に梯団で一番大きな船が狙われました。「ドゥーン」と音がして火柱を上げたと思つたら船尾から真つ逆様に海没してしまいました。

第二船の「安芸丸」(六、八五九トン)も同時刻海没し、乗員四、〇九六人の三分一は海没したとのことでした。我々のブラジル丸に乗船した衛生隊員は、甲板の下の一階の船倉を蚕棚のように二段に仕切り、上・下いっぱい兵員が乗っていて暑苦しく、私は終始甲板で休息を取っていました。当夜は前に申した天候で波が高く、乗員兵で船酔いする者が続出しておりました。米潜水艦の魚雷攻撃を受けると同時に、緊急汽笛が鳴り、船団各船はジグザグ航行を始めました。乗船部隊員用の救命胴衣や用具はほとんど無く、青竹筒二本に穴を明け、その中に生糸を入れたものを麻縄で継ぎ

合わせたものを、各人一個あて渡されていきました。それを二本一組みとし紐で結び、背囊のように、蓑を着るように両肩に結んでいました。乗船したとき、船員は「この船は古く、エンジンが悪い。石炭を炊いても速度が出ないから覚悟した方がいい」と言っていました。

潜水艦の攻撃を受けると各船はバラバラになって逃げましたが、護衛艦艇は暴風雨を凌ぎながら、爆雷攻撃をしながら米潜水艦をかわしていました。「ブラジル丸」は米艦の魚雷攻撃のためか、護衛艦の爆雷のためか船首右舷側に五〇センチくらいの亀裂がし、浸水してきました。船員はもちろん、乗船兵員も全員で地下船倉から、バケツ、飯盒などで水をかい出し、浸水した水を手渡しでくみ出しました。幸運にも船員その他の人員により鉄板で蓋をし、隙間にセメントを投入して、二日間かかって台湾の基隆港に退避入港することもできました。

この間、食事はなかなかとれなくて、携帯口糧乾パンにて交替で食事を取っていました。修理は二日半く

らいで終わり出港しました。梯団九隻のうち基隆港に着いたのは三隻しか見当たりませんでした。大変寂しくもなり、改めて米潜水艦攻撃を受けましたが海没を免れた幸運を喜び合いました。

十八日基隆出港、十九日高雄へ入港しましたが、飲料水の補給のためでした。しかし、港湾埠頭の倉庫群は米軍機の爆撃で全滅状態で、入荷の砂糖が焼け、カルメラの焼けた臭いが船倉の中にも充満してきました。焼跡でも所々で火柱が上がる状態でした。台湾人は一日昨日爆撃受けたと話しておりました。

バシー海峡の状況が良くなったということで、急遽出港しました。ところが高雄出港後、魔の海峡と言われたこの海峡に、またも米潜が出没するとの情報により、船はバシー海峡の島々（パプアン島、カラヤン島その他）に退避しながら航進しました。

二十三日、「ブラジル丸」は修理船ということで一番先に、比島北サンフェルナンド港に上陸しましたが（一隻は遅れた）、もう一隻は乗員その他の揚陸中に米軍機の空爆があり、埠頭が狭くて揚陸できない。一

隻が空爆により沈没しかけた状況でした。揚陸司令部は救助作業をしていました。

我々は上陸して、部隊兵員数その他を確認しながら四方を眺めると、港の直ぐ前の所に鉄條網を張り巡らした捕虜収容所があり、米兵か豪兵が、何か私らに言葉は分からないが、悪口をついたり、話し掛けている様子でした。北サンで揚陸した兵器、衛生機材その他を部隊隊員全員で持てるだけ持って行進しましたが、南国育ちの九州の兵隊もまいいっていました。行軍中、米軍のロッキード（双胴）と日本のゼロ戦が空中戦をし、日本軍飛行士が落下傘で降り救出されましたが、我が軍の防備が薄く悔しかった。

戦況は厳しく、米軍再上陸の情報もあり、強行軍が続きました。まして北寒の地満州から来た我々には、南国の比島の暑さには全員参りました。時々冷風が吹く海岸道路を歩くときは皆「ホット」するようでした。上陸時の空襲は約二十分も続きましたが、我々は先の上陸し助かった。しかし後の船の人々を救えないのが悔しいが処置のしようもなく残念でした。我が隊は

損害もなく、ただ一刻も早く、部隊の決められた陣地へ配置を指示されました。第二十三師団全体の将兵の大半は渡比中に海没し、約三分一を失っているのです。その欠員補充、物資の補給不足には悩まされたのであります。

二十六日、パウアレ着、ここはナギリアン道とマニラ街道の分岐点の町、ナギリアン道はバギオ市に通ずる道で重要な我が軍の守備路線であるが、海没船により衛生資材その他の物資の到着が遅れ、ここに駐留することになりました。

三十日、サンチャゴ、昭和二十年一月になり、カバ、アリガイ、アゴオと行軍を続けましたが部隊全員が顎を出し、疲れて眠りながら夢中で歩く者もあり、全員疲れ切つてしまいました。

その後、海岸近くのダモテス、ロザリオ、アリタチオと続いて歩きましたが米機の空襲が日中いっぱい続き、行軍も避難、避難の連続で眠りが大事か命が大事か分からなくなるほどで、疲労困憊する者が出て心配でした。

七日になると米大艦隊がリンガエン湾に入港しているという情報が出た早朝、米艦からの艦砲射撃が間断なく、終日続きました。夜になり特攻機が艦隊を攻撃する。対空射撃の閃光が花火のようでした。そのうち米軍の単葉機や複葉機が飛んできて、我が軍の陣地を観測して米艦隊に知らせるらしく、正確な艦砲が再三となくくるのだという情報も入ります。我が軍の飛行機は飛ばなくなり、我が軍は撃たれればなし、米艦船は湾上で時々と電気を付け、さながら不夜城のような有様でした。

日中は駐留地の横穴式退避壕にいても、観測機が低空に飛び空襲するので壕の外へ出て行動することができなくなりました。前線各隊から負傷兵の救援命令やらで衛生隊は忙しくなるのですが、昼は空襲のため収容作業ができない。衛生資材も応急の物だけだが、輜重隊が動く敵は電探で知り、砲撃をする。止まればまたそこへ弾がくる。動くと弾が追い掛けてくる。電探の性能には驚かされました。夜になると数名あて各隊に分かれて救護活動にでる有様で、渡比後、数日も

経過しないのに手持ち衛生資材も少なく、野戦病院への担架輸送も難しく、山間の退避仮収容地に集合させるので精一杯です。

衛生隊では最大限の治療手当をして、歩ける者は松葉杖をついてでも後方の病院に撤退してもらうことにしました。それでも収容できなかった兵を、担架兵は米軍の攻撃の凄まじさを話しておりましたが、「一兵たりとも収容するのだ」と部隊から厳命されておりました。

帰ってから聞いた話ですが、盟兵団（東北）の庄司部隊が旭兵団の北の鋸山にいて、米軍の上陸で負傷者が出たので我が衛生隊が救援に行きました。秋田県角館の少尉の人が大腿部貫通していましたが、翌日行ったら状況が悪く収容できなかったという、恐らく戦死されたでしょう。庄司部隊は随分やられました。これは裏から見た患者収容の情報です。

話が重複することもありましようが、四八八高地の臨時収容所では、米軍上陸とともに陸上戦闘が激しくなり、空からの銃爆撃が続き、その上にリンガエン湾

内の艦艇からは砲撃があるし、我が軍の陣地は苦境に追い込められました。陸戦では戦車を先頭に砲を撃ちまくり、接近すると火焰放射機で焼土作戦に出るので、日中は勝負ならぬと夜戦に望みをかけ、特攻切込隊が編成されました。

前線のみならず、各地から負傷兵の收容命令がくる。横穴式中壕内で負傷者その他の応急処置するなど多忙になる。担架中隊員は担架一台に三、四名ずつで班を編成し、危険を侵しつつ前線へ救難收容に終日追われしました。負傷者が担ぎ込まれると早速各隊付の軍医殿の指示を受け、応急医療処置をし、寸暇を惜しんで救援に当たりました。我が兵団は海没の不運もあり、衛生諸資材が少なく、補充もないため助かる命も残念ながら見送り、後方病院に移送したくても戦況によりそれもできない。そのため地中退避壕に仮收容するのに精一杯の様でした。

兵器を余り持たない衛生隊であります。担架兵は前線にて米軍の攻撃を物ともせず、負傷兵は一兵たりとも前線に残すなど部隊の敵命もあり、後方に移送

する姿は大変だったと見ていた人は申していました。兵器を一切持たず軽装で移動するため、我が身を犠牲にした担架兵もいると聞き、泣きもし、戦友に手を合わせて冥福を祈りました。担架兵が我が身を顧みることなく、ただただ衛生隊の使命を胸に貫いて全員がよく健闘したものと、今更ながら感無量なものがあります。

昭和十九年一月十日、戦況の急変により師団命令により部隊は後方地区に撤退を始めました。キャンプはベンゲット道付近に横穴式洞窟を掘って傷病患者の收容退避壕を造りました。私は命令伝達者として初年兵でありながら幹候出のため部隊陣地での生活はほとんどなく、戦闘開始以来単身で行動任務についておりましたので、初年兵、古兵の垣根を超越した協力関係でやらないとお互いに生きることが至難と考え、当番兵との人間関係は大切にしました。

避暑地バギオまで六キロごとにキャンプIⅦまでありました。その道路は日本人の労務者が作ったもので、十四日、バギオ市西方約六メートルのイリサンで



は、部隊と野戦病院―前線各隊と連絡業務が続き、終日休む暇もなし、戦況はますます我が軍に不利な情報でありました。

イリサンには一カ月いました。盟兵団の守備地でありませんが食糧が乏しく、一日に飯盒の内蓋一杯(約五〇グラム)の米でした。私は命令受領者だったので部隊本部へ行っていない。特に撤退途中なので部隊と別れ別れになったこともあり。山岳の崖の所で学校の四年先輩の谷口製材の田中社長と会った。山から下り国道に出た所に一軒屋がある。そこで米軍機に見つかり家に隠れたのですが、次々と銃撃に長時間さらされました。柱をぶち抜かれましたが我慢をしてみました。米軍機は帰っていききました。

四月、バギオの地下洞では尚武軍の司令部が機能し全軍に命令や指示をしておりましたが、空爆により周辺の松林などは焼け焦げ、倒木も各所にありましたが、洞窟は頑丈にできていてどこも破損しておりません。衛生隊は一、三〇八高地近くの山地に到着した。部隊員にもマラリヤ、食糧不足による欠食者の病気患者が

はじめました。衛生隊は地下防空壕に入り、その後、旭兵団も入って来て、後に転進して行きました。

防空地下壕の近くの低地に「赤十字」マークを屋根に縫い付けた陸軍病院がありました。四月二十日以降は空爆が激しく、中には歩けない患者が沢山あり、私たちだけでは手の施しようがありませんでした。旭兵団の命令で、(四月二十三日一二時於バギオ)「師団は二十四日、現陣地を撤退する」とあり、バギオ、アントモック金鉱、アグノ地下発電所を経てアンボラック付近に撤退しました。

後にインチカク、ボコド(山間の田園地帯)の田圃から籾を抜き取り鉄帽で精米し、軍足(靴下)にできるだけ詰めましたが、これがなければ明日の食糧はありません(五月十日ごろ)。岡田部隊駐屯地を過ぎ、水田地帯では他部隊が植えていた稲を刈り取り自活態勢が続きます。五月末山地に入ると雨期のためスコールが毎日あり、軍靴は破れ足の指が出てしまう。木の蔓で靴を縛っての行動に悩まされました。

密林地帯に入り、松の枝を松明としてともしながら

夜路を撤退して歩く。ジャングルには山蛭が首筋や巻脚絆の中、手首などから入り吸血され、始末が悪く困りました。毎日、スコールがやってくるので夜は松明が消え、山中を手探りで探りながら歩く。一步踏み外し、崖から落下すれば谷底へ転落で命懸けです。まだ、比軍のゲリラの襲撃がないだけ助かりました。

七月上旬、ブキヤスの山中で一軒屋を見付け仮泊しました。毎日単身で命令受領、伝令はゲリラに襲撃されるので注意しなければならぬ。ある深夜寝ていて、朝目を覚ましたら背囊・雑囊など、身に付けていない物全部盗まれました。疲れて眠っていたのですが、寝首をかかれただけ助かりました。従軍資料その他全部無いのです。

アグノ河渡河では、急流なので山から木の蔓を取り、繋いで対岸に投げ、それに伝わって渡ったのですが、途中流れにさらわれ危険でしたが、辛うじて助かりました。ところが毎日のごとく渡河をしなければならず、苦勞もありましたが、だんだんと渡河方法が分かり、早く、確実に渡ることができるようになりました。

その後、カバヨ、ガナバ、タキアック、タポイ、チノック、トツカンと撤退しましたが七月二十八日ころ、プログ山麓山中周辺の部隊露営地において曹長に進級、見習士官となりました。八月四日、十六日、カゴチットでは米軍機の飛来が少なくなりました。各所各地区に伝単（宣伝ビラ）が飛行機から撒布され、投降を呼び掛けたり、我が軍の敗戦の情報が伝わりましたが、だれもが敗戦を信用しませんでした。

北部ルソンの戦闘のときはプログ山中まで追い込まれたのですが、いつかは日本本土からの増援により、再攻撃し、転進できると信じていました。

九月二十二日、小カバヤン東地方の山中で旭兵团司令部より連絡があり、敗戦による終戦を知りました。「大本営の軍使、米軍軍使による終戦命令あり」と、尚武集団司令部から無線により通知あり、各部隊に発令されました。部隊各所では日本の将来を思い、捕虜になるなど開闢かいびやく以来の出来事に直面したので、割腹自刃する者、手榴弾で自殺する者などが発生したとの情報も入りました。

二十四日、北部ルソン、ボンドック街道五、六キロ地点で終戦による投降勧告により集結が命ぜられました。それによりますと、①投降（日本軍将兵は所持する武器その他等を提出、回収）。②投降集合順により氏名・部隊名等経歴書調査始まる。③米軍も食糧の調達が円滑でなく給付、状況悪しく米軍携帯口糧給付。

二十五日、ボンドック道五十二キロ地点で米軍用テント幕舎に入る。①着用軍服その他衣類の回収、焼却始まる。軍歴書類回収。②DDT消毒、簡単な健康診断。③米軍による日本兵員数隊列調査不手際で手間取る。④米兵・豪兵らによる、時計、万年筆、日本紙幣、軍刀等の略奪が公然と行われる。米軍将校ら幹部は見えて見ぬ振りをし黙認状態。

九月三十日、十月三日、バギオ俘虜收容所。①給与アンパン型米軍食器に米粒が数えるほどの粥、ミルクコーヒー等にて腹が空いて歩けぬ状態。②逐次聴取調査始まる（戦犯容疑者）。

北サンファン、アゴウ町、ルスパニスなどを経てカランバ捕虜收容所にて、戦犯容疑のための審査始まる。

①比島人の一方的ともいえる申出の容疑にて全員が大変迷惑をしている。命懸けである。皆で、日本軍人として毅然とした態度で望もうと話し合う。②私の嫌疑は全然該当しない。その地に行っていない、ただ顔が似ているだけで訴えられたのは心外だ、また部隊も違う、開戦から終戦まで単独行動をしていたし、「再三再四、比島人の訴えの場所には行っていない」と答弁説明するも一カ月間拘束される。③比島人のでたらめの訴えには、話にならんと偽名を使う者もいる。

モンテンルパ收容所より十一月中旬出所し、二十一年八月ころまで、パタンガス收容所、キャンプNo2にて労務作業に服す。①準士官幕舎に入る。②労働内容倉庫内の整理、保管資材の整備、兵器、自動車などの海上投棄。③米軍兵器集積地、集積地は四キロにも及ぶ広大な土地に野積みにしてあり、物量の多大さに仰天した。

昭和二十一年八月二十日ころ、肋膜炎の疑いあり、カランバン米軍病院入院、二十二年九月二十日ころ退院（入院一年一カ月）し、同日復員船に乗船。十月六日、

大村港入港、復員手続を完了(傷病証明書その他下附)。身体検査後、無料切符、旅費をもらい、八日帰郷の途につく。

## 比島マスバテ島

### 泉部隊一衛生兵の生還

岐阜県 瀬ノ上 尹 男

私は大正十一年七月八日、岐阜県大野郡清見村大字牧が原で生まれました。父は農業、母は健在、兄は昭和十年中支へ、それから仏印へと長い軍務でした。私は次男、三男六女の兄弟でした。大野郡大八賀役場に勤め、養蚕の指導員をしていたため村の囑託となり、各役場を転々としていました。

戦争も激しくなり、兵隊になることは覚悟をしていきましたが、昭和十七年徴集兵として甲種合格となり、昭和十八年三月一日現役兵として、歩兵第六十八連隊補充兵(岐阜市)中部第四部隊に仮入営しました。同

日、独立歩兵第十二連隊(第二十六師団―泉兵団)要員として岐阜の兵舎におり、三月十四日下関を出帆し(釜山上陸、十六日鮮満国境、十七日滿支国境(山海関)を通過、十八日独立歩兵第十二連隊第一中隊に編入したのです。駐屯地河北省滄県で一期の教育を受けました。

歩兵教育を受けている途中で試験があり衛生兵に合格しました。五月二十二日、衛生兵教育のため大同の陸軍病院へ中隊から十二名を引率して行きました。

二十四日大同着、警備しながら教育を受け教育修了、二十九日大同発、部隊のあつた永定莊へ復帰、第一中隊へ編入しました。昭和十八年秋季冀西作戦があつたが、私は残留し靈邱れいきゅうに行きました。

その後討伐に出たのですが、私は討伐男と言われていました。討伐があれば衛生兵は必ず同行しなければならぬ。宣撫工作もあり、大部分は八路軍(共産軍)討伐が多く、その後は廣靈くわうれいにも行きました。

五月廣靈発、大同、河南省陝県から討伐に出る。戦闘、戦闘の連続だが犠牲は比較的少なかった。しかし、